

古里の「今」伝える

震災・原発事故から10年。復興の動きを取材し、発信したジャーナリストスクールの参加者



ジャーナリストスクール

2021年10月30・31日、11月14日

相双地方、いわき海浜自然の家、富岡町文化交流センター「学びの森」

小中高生新聞作り

復興に励む人の思い取材

福島県の子どもたちが東日本大震災、東京電力福島第一原発事故から10年を経た相双地方を取材して新聞を作る「ジャーナリストスクール」は2021年10月30、31日と11月14日の3日間、双葉町や富岡町などで開かれた。小学5年生から高校2年生までの12人が参加し、福島のことを伝える新聞を完成させた。

子どもたちは3班に分かれ、懸命に復興に取り組む人たちの思いを聞いた。

災・原子力災害伝承館（双葉町）、大堀相馬焼協同組合（浪江町）、日本原子力研究開発機構（JAEA）櫛葉遠隔技術開発センター（櫛葉町）、NPO法人富岡町3・11を語る会を取材。写真を撮りながら、2日目はいわき海浜自然の家（いわき市）で地元新聞社の記者らの助言を受け、新聞作りに挑戦した。取材で得た情報を基に記事を書いて、見出しを付け、紙面をレイアウトして製作した。アイデアを

出し合って独創性あふれる題字も考えた。

最終日は富岡町文化交流センター「学びの森」で、地元住民らに新聞を披露した。活動で学んだことを筆々と発表し、「私たちが福島復興を見届ける」「福島のことを発信し続けたい」などと語った。

「震災・原発の経緯・教訓、復興状況伝承事業」として福島県、ふくしまの学び実行委員会が主催し、今年で9回目。福島民報社と福島民友新聞社が特別協力した。

池上彰さん特別講師

最終日の発表会にはジャーナリストの池上彰さんが特別講師として参加し、子どもたちが作った新聞を講評した。

「ジャーナリストとして最も大切にしていることは人間らしさを失わないこと。特ダネが欲しいからといって人をだますようなことは絶対しない」「取材し報道することによって世の中が少しでも良くなるように願って仕事をしてきた」など、子どもたちの質問に答える形で自身の信条や報道姿勢も明かした。



記者の心構えや新聞作りのコツをアドバイスする池上さん

講評として参加し、子どもたちが作った新聞を講評した。目を通し、「着眼点が素晴らしい」「読む人の立場になって易しい言葉に置き換えて」など優れた点や改善点を指摘。「取材を通して福島で何が起きているかを学んだと思う。私たちが福島復興という歴史をつくっているという思いを持ってほしい」と呼びかけた。

本事業は被災者支援総合交付金と福島県東日本大震災子ども支援基金を活用しています

浪江

ひだり駒



大堀相馬焼

大堀相馬焼伝統つなぐ

震災乗り越え、未来へ

私たちは、大堀相馬焼協同組合の小野田利治さん(59)の指導を受けながら、陶器作りを体験した。大堀相馬焼の展示即売場と工房は、浪江町の「なみえの技・なりわい館」内にある。私たちは小野田さんから大堀相馬焼の歴史や独特の技法、震災後の現状について話を聞いた。

相馬地方の伝統的な焼き物「大堀相馬焼」は江戸時代から三〇〇年以上の歴史をもつ。東日本大震災によって浪江町の人々は避難を余儀なくされた。「大堀相馬焼協同組合」の理事長小野田さんは、大堀で十三代続く窯元。浪江町大堀地区に震災前は二十軒以上あった窯元は、廃業・移転を余儀なくされた。現在福島県中通りの本宮市に窯を構える。震災によって影響を受けたのは住居だけではなく、原料にも影響があった。焼き物の特徴は青磁釉という独特の色である。その原料である砥山石も粘土も放射能汚染によって地元で採掘できなかった。原料にも影響があった。焼き物の特徴は青磁釉という独特の色である。その原料である砥山石も粘土も放射能汚染によって地元で採掘できなかった。



▲小野田さんの手ほどきを受けながら、陶器づくりを体験した。

大堀相馬焼に描かれる馬は走り馬と呼ばれ、その多くは左向きである。理由としては、右利きの職人が馬の頭から描くと、左向きの方が描きやすいとされる。しかし左向きの馬は「右に出る者がない」という言葉遊びのような意味も含まれている。熟練の技で描かれた走り馬は昔から縁起がいいものとされてきた。



▲貫入や二重焼きが大堀焼の特徴

くなくなりました。組合では、県の協力を得て全国各地の釉薬や粘土を試

「なりわい取り戻したい」

組合理事長小野田さんに聞く

震災前と同じように浪江町内で活動したいか、という質問に対し、小野田さんは「浪江町は除染が進んでいるが、古い家屋は解体工事が進んでいる。避難先で新しい生活を始めて十年も経っているの、戻っても元の生活を取り戻すことは難しい。ただ、自分としては町内に居場所をつくりたいなあ、と思っている」と話してくれた。

今後の目標については、「技術・伝統をつないでいくとともに、震災前のなりわいを取り戻し



▲大堀相馬焼の歴史と現状を語る小野田さん

江戸時代からの伝統の技

他にはない工夫

大堀相馬焼の歴史は江戸時代にまでさかのぼる。陶器は当時の相馬藩の特産品であり、江戸末期の窯元数は藩内八村で百戸を超えた。

しかし明治時代に入り、自由貿易が促進されると、廃業する窯元が続出。藩からの援助も途絶え「他にはないモノ」でないと売れない時代となった。そこで考え出されたのが独特の工夫である。

特徴的な二重構造は、内側と外側のパーツを別々に作り、後に接着する手法でできている。二重にすることで入れた湯が冷めにくく、手に持っても熱くない。表面に描かれた絵にも



意味があり、下部の黒い部分を白く塗り、波を、ハート型の穴

は水面を飛ぶ千鳥を描いているという。長い歴史の中で研磨された知恵と工夫が込められた陶器なのである。

馬くいく

五年ぶりにジャーナリストスクールにOBとして参加した。参加者は小学校五年生から高校二年生までさま

ざま。学年の違う仲間と協力して取材し、記事を書き、新聞を完成させる。子どもたちにとっては十分に肉体と頭を使う作業であったと思う▲多くの人と関わって新聞を作る事は、頭だけで考えていては分からない大変さがあつたようだ。ものごとを考えるのに、具体的な日々の体験がいかに肝要であるか分かったと思う▲日常生活の中での具体的な体験を軽視することはできない。歴史は多くの人々の個別的な日常体験の集積だとも言えるからだ。彼らが十年前の被災地での取材体験を通して学んだことは、一人ひとりが自らの歴史観を形づくる契機になったに違いない。(横村)

形づくり難しかった

「なりわい館」で陶器づくり体験

私は、大堀相馬焼づくりを体験した。はじめに粘土で底の部分を作り、

細長くしたひも状の粘土を重ねて形を作っていく。私はコップを作った。

取っ手も付けて、お茶やミルクを飲むコップにした。粘土が余ったので、小さな器も作った。



▲何度か小野田さんに修正してもらう。

どちらも一番苦労したのは、重ねた粘土と粘土の境をふさぐことだった。失敗しそうな時にすぐに直してくれる小野田さんの技は、とてもすごいと思った。四十年もやっているベテランの技だと思った。小野田さんは、「大堀相馬焼の技術、伝統をつないでいかなければならない、浪江をもつ

浪江町の道の駅にある「なみえの技・なりわい館」で小野田利治さんに話を聞いた。小野田さんは「大堀相馬焼協同組合」の理事長である。ふるさとである浪江町大堀を離れて十年。現在は中通りの本宮市に工房を構え、浪江に「通勤する」形になった。

「一週間ぐらいで、すぐに帰れると思っていた。まさか今日まで十年半も帰れないとは思っていなかった」という。震災前は二三軒あった窯元達もそれぞれ離れた土地に避難し、仲間とは離ればなれになった。震災後に

意見

もう一度焼き物の里を

抱えている。「同じ場所です仕事をしたが窯元達にも都合があるから難しい」と言う。(大高)

浪江町大堀地区は現在も立ち入り制限が続く。地区には物産会館「陶芸の杜おぼり」の建物が残る。震災前は多くの窯元の作品が展示・即売されてにぎわった。小野田さんは「陶芸の杜」の復活を夢見ている。「建物はしっかりしてるんです。周囲の除染も進んでいるので、もう一度皆が集まれる施設にしたい。もちろん浪江町がもう一度楽しい町になって欲しい」と話す。

国指定の伝統的工芸品「大堀相馬焼」の今後の伝承と、大堀地区の復興を私たちも応援したい。



▲出来上がった私たちの作品（左）粘土の厚みの調整が難しい。

と楽しくしていきたい」とおっしゃっていた。青磁色は、大堀相馬焼の伝統色である。小野田さんは「釉薬を混ぜていろいろな色を出す中で

も、改めて青磁の色を大切にしたい」と言っていた。青磁色の他にピンク色や緑がかかった青色等がある。私は緑がかかった青色を選んだ。(高倉)

伝統の技を絶やささない

県内の3窯元にも取材

事前取材として福島県南地方の西郷村、白河市、矢吹町にある大堀相馬焼の三つの窯元を訪ねた。いずれの窯元も故郷浪江を離れた地で「大堀相馬焼」の伝統と技を継承している。現在「大堀相馬焼協同組合」に加入して

いる窯元は十五軒。そのうち制作にあたっている窯元は七つである。

離れていても強い仲間の絆

西白河郡西郷村に窯を

私たちが作りました。

新聞の見方変わった

僕は、ジャーナリストスクールの書き通して原稿の書き方や新聞のある必要性にについて知ることが出来た。さらに今の浪江町の現状について考えや理解を深める事が出来ました。今回学んだ貴重な経験を忘れずに今後の生活等で活かしていきたいと思います。(大高 空 矢吹中二年)

この新聞の作成にあたり、相馬焼の文化や魅力に触れる機会を頂いた。編集の際、取材先の小野田さんの「相馬焼の技術、伝統を伝えていきたい」



▲左から大高、折笠、三島木、高倉の各記者

という言葉が思い出された。この新聞が伝統の継承の足掛かりとなれば幸いである。(三島木 桜子 安積黎明高校二年)

私は、新聞作りを通して、一つの新聞を作るのに様々な人が関わり、大変な作業をしているのだと実感した。紙面に、文章を分かりやすく詰めていく作業の大変さが分かった。今回学んだことを生かし、新聞への見方を

慎一さんに話を聞いた。山田さんは愛知県立瀬戸窯業高等学校専攻科を卒業後、父と職人のもとで修行し現在にいたっている。大堀相馬焼の技法を用いて作品を制作するほか、今では途絶えてしまった白河地方の焼き物「白河焼」の復活にも取り組んでいる。震災後に仲間の窯元達とは離れてしまったが、互いに連絡を取り、なるべく会う機会を作るようにしているそう。

最後は西白河郡矢吹町にある窯元「栖鳳窯」の山田正博さん。祖父の時代から続く家業を継いで、山田さんで三代目。息子さんが四代目をめざして修行中だ。山田さんは矢吹町の工房で制作を行い、同所で販売まで行っている。山田さんは常に「自分の窯元が一番だ」という思いで制作にあたっているそう。震災後、浪江町を離れて避難場所を七か所も転々としたそう。現在は矢吹町内に住まいを構えている。「『伝統的工芸品大堀相馬焼』の名前も技法も、福島県内での再開だからこそできることだ」と話している。(大高)

富岡の桜

未来へのバトン

◆この題字名にした理由 富岡町のシンボル「夜の森の桜」。原発事故後、夜の森の桜はバリケードで隔てられました。題字は、それでも春になるとけなげに咲く桜に、愛おしさや希望を感じている町民の心を表しました。取材班5人が話し合って決めました。

大切なおだがいさまの心

富岡町3・11を語る会

青木淑子代表

2023(令和5)年春の全地区避難指示解除を目指している富岡町で、青木淑子さん(73)はNPO法人「富岡町3・11を語る会」の代表を務めています。震災語り部の青木さんは「放射線の被害は目に見えませんが、それだけに原発事故被害を言葉にする役目が大切」と言います。東日本大震災・原子力災害伝承館で青木さんの口演を聞き、震災を伝える活動取材しました。

富岡町と川内村の住民は、郡山市のビッグパレットふくしまに避難しました。ピーク時には3000人に達し、広いスペースが人で埋まり、ストレスは極限に達しました。同市に住んでいた青木さんは毎日、避難所支援に通ったそうです。震災前、青木さんは富岡高

の教師で、町になじみがあつたのです。おだがいさまセンターで、青木さんは新聞を作り、目が悪くて新聞が読めない人にはミニFMで情報を伝えました。

震災後2年が経ち、自分たちの町で何が起こったのか伝えようと、センターのコミュニケーションの中から語り部のグループが生まれました。

語り部の口演では、富岡町から川内村に向かう

伝承館前に立つ青木さん(左)と取材班



一本道が避難の車で大渋滞している写真が紹介されます。30分の道が3時間もかかりました。「すぐ帰れる」と思っていた町民の横には、防護マスク姿の警察官が交通整理をしていました。あとで情報の格差を痛感したそうです。また、母牛に死なれた子牛が、震災1ヵ月後も生き残っていた話もあります。長年牛を飼っていた人によると、自分の子以外に乳を飲ませることはないそうです。震災の極限状態で、牛も助け合ったのでしようか。

青木さんは17年4月、富岡町に移住しました。町民と同じように町を愛しているからだそうです。「人生を根こそぎ変えた原発事故被害」を語るのは「被災者の責務」と訴えます。「町を創るのも壊すのも人。人に寄り添い、町のコミュニケーションを再生したい」と将来の夢を話してくれました。(小林幸乃、渡邊莉菜)

伝承館内を見学する参加者



次世代の伝承者育てたい

青木さんインタビュー

私たち取材班は青木さんに活動を通しての思いを聞きました。

Q、これからの課題は何だと思いますか。

A、若い世代の語り人(語り部)育成です。現在活動している人の大半は高齢者。震災を語る語り人がいなくなってしまう。

Q、富岡町の変化はどう感じますか。

A、町は今、3種類の住民がいます。復興関連で住んでいる人、旧住民、そして私のような移住し

てきた新住民。震災以前の町と違います。若者の学校と多様な人が話せる場所がほしい。特に学校は地域をつなぐ大切な存在と感じます。

Q、どこまでいけば、町の復興といえますか。

A、確かに、施設や道路は新しくなり、目に見える復興は進んでいます。一方で、いろんな立場の住民同士が違和感なく住め、分かち合えるよ

う感じますか。

A、町は今、3種類の住民がいます。復興関連で住んでいる人、旧住民、そして私のような移住し

うになれば、内面まで復興したと言えるのでは。

Q、震災のことを話していて辛いのですか。

A、震災当時、郡山にいた私は原発事故避難を経験していません。経験した語り人によると、思い出してしまうと辛いことがあるそうです。

聴衆が共感してくれると、気持ちに通い心が整理されると言います。コロナ以降、オンラインが増えましたが、気持ちが大より通うライブの場は大事です。(富田紗那、中島空音、八木沼杏菜)



富岡町の思いと語り部活動について話す青木さん



八木沼 杏菜

(平三小・5年)



渡邊 莉菜

(磐城緑陰中・1年)



中島 空音

(ふたば未来中・3年)



富田 紗那

(相馬高・2年)



小林 幸乃

(相馬高・2年)

私たちがつくりました

今度は私たちが伝える

今回初めて語り部の方の話の聞ききました。今まで小学校、中学校でも震災のことを聞いたり話したりする時間はありませ

語り継ぐ大切さ

初めて語り人口演を聞き、もう薄れかけていた当時の記憶を思い出しました。被害が目に見えない災害である原発事故は

故郷を言葉で繋ぎたい

私は語り部の青木さんから、富岡町での震災の話の聞ききました。様々な人の体験の話から、多くの人の人生を変えた出来

原発まだわからない

私は震災当時、まだ2歳でした。だから、原発で水素爆発が起きたことは分かりませんが、どのよう

忘れないで伝えよう

私が生まれて間もないころ、震災が起きました。青木さんは「赤ちゃんを育てていた親が一番大変だ」と話していて、きつ

佐野 宏翔

(大学生・20歳)



ジャーナリストスクールの卒業生として、取材や記事づくりの手伝いをさせていただきました。

小学生から高校生までが集まって一つの記事を作り上げるということは他のイベントでは体験することが難しいことです。

以前このイベントに参加した自分も改めて、新聞を作る難しさ、チームとして協力することの大切

さを学ばせてもらいました。また、取材の際に必要な「疑問に思ったことは何でも聞く」ことは取

材だけでなく、情報が氾濫している世の中で、今後の人生に生かせるものであると感じました。(佐

野 宏翔)

◇

先日首都圏近郊で大きな地震がありました。それを機に震災当時のことを教えて欲しい、と言われることが増えました。11年前の当時確かに自分で経験したことであ

っても、人に事実を「正

浜松 郁美

(会社員・23歳)



OB・OGからエール

踏み込む勇気／伝える楽しさ



青木さんに語り部の活動について質問する記者

しく伝える」ことはとても難しいです。ジャーナリストスクールOGとして参加するのは2回目になります。誰に何を伝えるために取材をするのか、どうやって自分の言葉で記事にしていくな

(浜松郁美)



浜松さんから紙面作成のレクチャーを受ける記者

ロボットが拓く廃炉

檜葉テックニュース

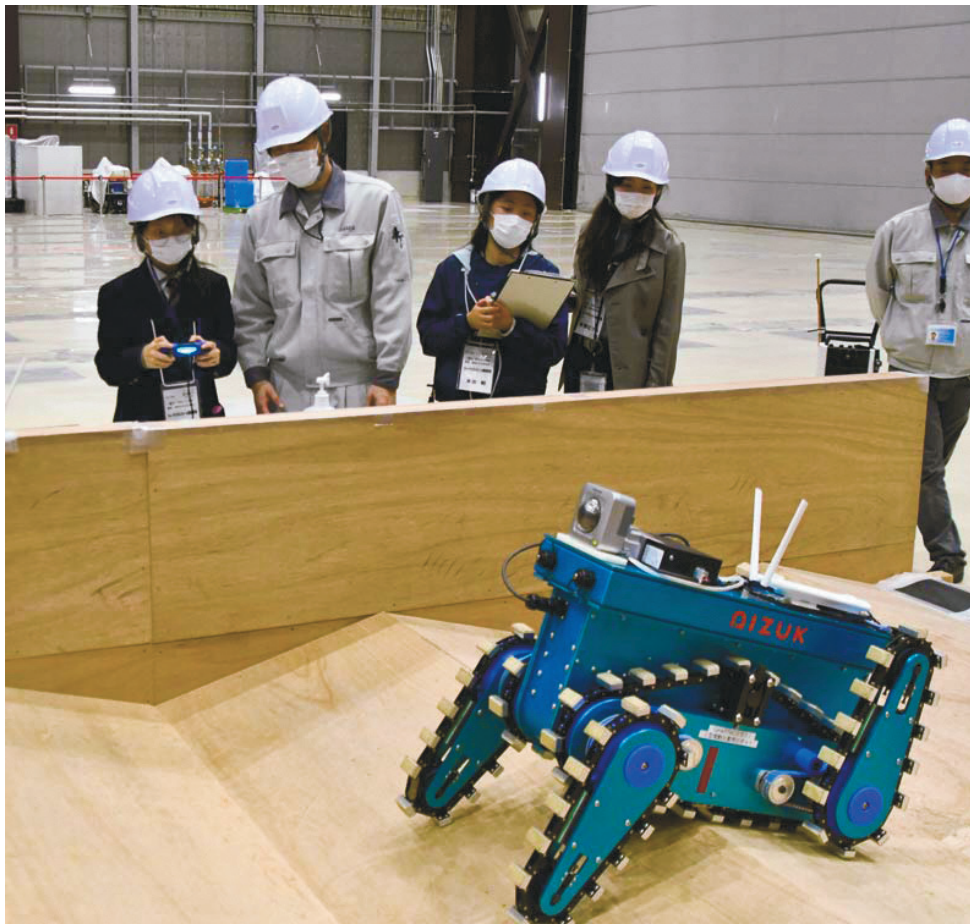
ジャーナリスト
スクール3班

人々の熱い思いのせ

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から10年半あまりが経過した10月30日。私たち、ジャーナリストスクール3班は福島県檜葉町の日本原子力研究開発機構(JAEA)の檜葉遠隔技術開発センターを訪ねた。そこには日常と違う異空間が広がり、近未来的な施設だと感じた。原発廃炉作業に用いるロボット技術に理解を深め、そこで働く人たちの熱い思いに触れた。(祓川瑠紋、佐藤花香、本田結)

同センターは主に福島第一原発廃炉に向けた研究開発を加速させるため、ロボットの実証実験などを行う施設。試験棟(地上2階建て、鉄骨造)と研究管理棟(地上4階建て、鉄骨造)からなる。総工費約100億円をかけ、2016(平成28)年4月に運用を開始した。

試験棟ではモックアップ(実物大模型)を使った試験ができる。実際に演出しにくい高層建築物や水中などでの試験が可能だ。廃炉作業に関わらないロボットの実験にも活用でき、高専学生によるロボットコンテストなどの会場にも使われている。昨今の新型コロナウイルス禍においてリモートで試験を実施した事例もあるという。試験棟の前に立つとまず、特撮



ロボットを操作する取材班

ヒーロー「ウルトラマン」を彷彿(ほうふつ)とさせた。建物の高さは40メートル。

研究管理棟では原子炉を4面スクリーンで立体的に再現したバーチャルリアリティ(VR)が体験できる。



VRで原子炉内を疑似体験

映像は実際にロボットが炉内を撮影したものだ。画面には空間線量なども表示され、臨場感あふれる映像と相まって、緊張



ロボットの操縦を体験する祓川記者(右)

走行型ロボットは危険箇所の階段昇降に、水中ロボットは炉心溶融(メルトダウン)した原子炉建屋内探索にそれぞれ用いられる。走行型、水中の両方を操縦したが、ロボットのカメラを経由して作業をするため、縦と横だけでなくカメラ越しの奥行きも考えてロボットを操縦する難しさに気づいた。廃炉にはまだまだ時間がかかる。それを支えることの難しさや技術を実感した。(班長・祓川瑠紋)

難しさ、技術の高さ実感

水中・走行ロボット操縦体験

取材で話を伺った加島洋一副センター長(60)は、「原発事故に直接関わったわけではないが、原子力に携わっている者として、責任を感じている。確実に廃炉を成し遂

げ、地域の復興に力を尽くしたい」、主に事務の仕事をしている柴沼蒼さん(27)は「人と接することが多く、県外の人は『福島が怖い』と思っ



高さ40メートルの試験棟

ている人がまだまだ多いと感じる。正しい情報を発信したり、イベントや祭りなど地域と関わることで福島の復興のきっかけになれば」とそれぞれ思いを語る。

ロボット開発という「固く、冷たい」イメージもあるが、そこには働く人の熱い思いが宿っていた。福島の復興の行く末を見届ける私たち世代が、風化させることなく自分の問題として捉えなければならぬと感じた。



安積黎明高1年 祓川瑠紋

檜葉遠隔技術開発セン
ター(NAREC)は日
本原子力研究開発機構

システムの開発に携わる施設である。被災地を「チャレンジの地」へと変えるべく浜通り地域に新たな産業の集積を目指す、国家プロジェクトである「福島イノベーション・コースト構想」のもとに多様な挑戦を続けている。私は東日本大震災で発生した原子力災害による生じた原子力災害による炉心溶融(メルトダウン)したものを回収するため副センター長の加島洋一さんをはじめとする職員の方々に大変お世話になった。丁寧に対応して下さったため、より充実した体験ができた。これからの原子力災害の学習を続け、見聞を広げたい。

学習続け見聞広げたい

ことも多い。震災を風化させないために語り継いでいくことが大切との思いから、ジャーナリストスクールに参加することになった。加島洋一副センター

伝えていく責任を痛感

相馬高1年 佐藤花香



東日本大震災が起きた時、私は5歳だった。今、私は16歳になった。記憶に残っていることもあるが、忘れてしまっている。に所属している。記憶に残っていることもあるが、忘れてしまっている。



植田小6年 本田 結

私が檜葉遠隔技術開発センターに行くまで、いろいろなことを経験した。それは、VRで物の

ことができました。試験機には、布でできた高さ約20cmもあるシャッターがありました。さりとて、暗いところをライ

復興担う思い分かった

入れ込んで動かすことができるということ。細かいところまで再現されていました。VRで原子炉内の様子を理解する



私たちが製作しました

お忙しい中、取材にご協力くださった檜葉遠隔技術開発センター職員の皆さん、ありがとうございました。(取材班一同)

原発廃炉、多様な視点で

卒業生の冒



今回ジャーナリストスクール卒業生として檜葉遠隔技術開発センターの取材に同行した。この施設は福島イノベーション・コースト構想の廃炉を担っている。技術開発やロボットについて何も知らない私は施設に向かうまで受講生の取材を十

く、このように人々の心を知ることで、取材を進める中、この施設の将来が気になった。廃炉が完了すればこの巨大な施設はどうなるのか。副センター長の加島洋一さん(60)の回答は「なくなる」という言葉で終わった。これは廃炉が終わったということ。それは喜ばしいこと」という言葉が彼らに印象に残った。彼らは廃炉を目的とした施設が必要ない世を願っている。廃炉や復興の思いに触れることが嬉しい」と語った。外側から見える技術開発の面だけではな

復興、肌で感じ…新聞で思い伝える

日本原子力研究開発機構（JAEA）櫛葉遠隔技術開発センターでロボットを操縦する子どもたち。廃炉作業の難しさ、職員の熱い思いに触れた



「話し方に説得力を持たせて」「もう少しゆっくり話して」。新聞を披露する前に入念に発表練習 ▲

ふくしまの今、復興の姿を伝えたい。相双地方で繰り広げられた3日間のジャーナリストスクールで、子どもたちは古里の現状や人の思いを肌で感じた。ジャーナリストの池上彰さんと交流しながら、記者の心構えや新聞の「伝える工夫」にも理解を深めた。



来場者の前で新聞を発表し、池上さん（右）から講評を受けた▲

実行委員長を務めた相馬高教諭の武内義明さん。スクールの目的を示し、取材や紙面製作を温かく見守った



「富岡町3・11を語る会」代表の青木淑子さん（右）を取材する子どもたち。語り部活動の意義や復興への思いを聞いた ▲



整理記者からレイアウトのアドバイスを受ける子どもたち。読みやすさを考えながら作業に取り組んだ

発行

福島県文化スポーツ局生涯学習課

ご意見、ご感想をお寄せください

〒960-8670 福島市杉妻町2-16 電話024(521)7404 ファクス024(521)5677

メール shougaigakushuu@pref.fukushima.lg.jp ホームページ 福島県 生涯学習課 検索